

井手恒雄著 『中世日本の思想と文芸』

白石, 悌三

<https://doi.org/10.15017/12262>

出版情報 : 語文研究. 20, pp.48-50, 1965-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

井手恒雄著『中世日本の思想と文芸』

白石 悌三

井手恒雄氏の『日本文芸史における無常観の克服』『平家物語論』に続く第三論集である。

- 一 「この一筋につながる」(芭蕉)の意味
 - 二 中世の詩精神
 - 三 和歌仏道一如観
 - 四 仏心風雅渾融説批判
 - 五 「あはれ」の再検討(中世歌僧の論を兼ねて)
 - 六 遁世思想
 - 七 いわゆる説話文学の文学的価値
 - 八 徒然草と仏教
 - 九 日本人の貧困とわび・さび
 - 二〇 心敬
 - 二一 心敬と自然美
 - 二二 「かへりみ思ふ心」(隠者文学論批判)
 - 二三 花山院の「花見る人」の歌
- ―『日本文芸史における無常観の克服』補遺―

一四 無常観というもの

―『平家物語論』補遺―

一五 自己の問題(日本文学研究方法覚書)

以上、十五の論文を通して、ただ一つの論理が明快に語られている。「仏法と文筆詩歌と、この二つのものの関係は、ほんとうのところどう考えられねばならないのであろうか」という自らの問題設定に對して、「中世文芸の中世文芸たる所以の詩精神は時代の支配的イデオロギーである仏教的世界観と人間精神との対立葛藤の所産であると信じる」著者の「持論」が、前二著からの一貫した姿勢でくりかえし強調されている。ともすれば人間不在の大著が多い昨今、本書の明確な主体性と啓蒙の熱意は、すがすがしい印象さえ与える。

たとえば、西行・慈円など中世歌僧の作品を論じた第五章は第一に、彼等が「自然美にあこがれ、月・雪・花のあはれを愛したというのが、何か人生の雑事から解放された自由の境地での風流韻事を意味するのであれば、それは全くの誤解である。かれらは、妻子を捨て世を離れるのと同じ意味で、自然美から遠ざかるべき立場にあったというのが、歴史の現実である」第二に、彼らが歌っているのは「草庵に閑居して訪問客をも厭わねばならない身でありながら、人の訪れを待ち、あらゆる執着を断つべき身でありながら、自然美に心ひかれるのをどうしようもない、そういう矛盾である。それは当時の仏教の絶対的な禁欲主義と、これら天才的人物の豊かな人間性との、注目すべき矛盾でもある」と結論する。かかる論を積み重ねることによって、本書が一般読者へ、「今日われわれは過去の封建制の

残滓を一掃すべき段階にまで来ている。旧日本を支配した教義をも自由に批判すべき時期に達している。儒教とか、仏教とか、そのような教義が人を正しうするもののように見えて、実はこれを歪めるものであつた歴史上の事実を、正確に把握しなければならぬ「ことを啓蒙し、学界へ、文学環境としての中世仏教の実体の究明を提起しえたことは意義深い。

中世文学の専攻でない私には、はじめ二つの芭蕉に関するものをのぞいて論文の価値を云々することはできないが、「中世文芸には仏教思想の影響を受けた深遠幽玄なものが多いと見る見方が、支配的である。」だが「それは実はあまりにも宗教的な環境の重圧によく堪えて、人間精神が切実な自己表現に成功した事実が誤つてそう見られるのであつて、決して仏教が文芸の内容を豊富ならしめたというようなものではない」と考へる著者の指摘が、本書の随所にアンチテーゼとしての役割を果たしていることは認められよう。窪田空穂説が批判されているが、西行の歌の解釈には今日印象批評を乗り越える厳密な考証が要請されようし、また、芭蕉の詩精神が西行・雪舟・利休等の芸術精神につらなるものであり、「それは中世の現実とマッチした仏教的世界観の所産であつた」といつた筆のすべりもいましめられよう。「ささめごと」のいわゆる和歌仏道一如観が、実は歌人・連教師の間で案出され、もてはやされた最高の狂言綺語であるという如きも、学界のまともな批評を受けるべきであらう。

固陋な国文学界の無理解は著者の目にあまるのであらうが、著者の論点の正しさを認める人も多い。その意味でもっと堂々

たる論陣をはっていただきたいと思う。説得に性急なあまり、本書には否定するにつけ肯定するにつけ諸説の援用が多いが、このような論法は、相手の説のとり方に万一ずれがあると空転する。誤れる常識を相手とどることも、読者によって常識とするもの想定にずれがあつてはもどかしい。そこでアンチテーゼならぬ著者のテーゼの發展を期待する読者の一人として、方法論に関して抱いた疑点のいくつかを提出し、以つて不適任な評者の責めをふせぎたいと思う。

古今に不変の人間性を信じる著者の態度は、本書をヒューマニステックな彩りに美しく染めあげている。しかし、論拠としてはいささか抽象的すぎて、時代と環境によつて顕現する人間性を具体的に掴むことができない。著者の論の根幹をなす「仏教的」なもの「人間的」なもの定義が、敵対関係という相互規定のみで、それ自身としての規定に欠けているのは一番の問題であらう。

両者の対立葛藤の所産として中世の詩精神を把握する著者の持論は、「仏教的」なもの他を置きかえればいつの時代にも普遍的な文学論と察せられるが、あまりに明快な論断は、かえつて、近世を否定した近代の理論が、近世に否定された中世にうまきはまりすぎたのではないかという不安さえ招く。何ら限定なしにこの公式をすべての時代に適用することには、いささかの躊躇があらう。

また中世の場合でも、読者への説得を有効にする原則論的適用が、一つには文芸史における無常観の克服の過程をおろそかにし、ために平安末期の西行から近世元祿期の芭蕉まで、登場

する詩人の相貌をみな同じにしてしまったきらいがないだろうか。また一つには文学的な「物の見方考え方」を文学作品たらしめている表現面への顧慮をおろそかにし、ために諸ジャンルの扱いを同じにしてみましたきらいがないだろうか。

読者における当為と実在、評価と認識の混乱、それを引きおこすものが、著者の、作品に対する、またそれを論じた諸家の説に対する態度の中にあつて、道元の評価や、家永三郎説、西尾実説の受けとめ方に響いているように思う。

最後に強調したい。いわゆる仏心風雅渾融説に対して吐かれていた「そういうことが、こういう歌の一つ一つから帰納されたものではなく、ほんとうのところ解釈のつじつまを合わせるため、前以つて用意された仮説であることがわかる」という厳しい批判が、「偏した見方であるとかないとかいうことになれば、結局主観の相違ということになり、議論が行きづまる恐れがある。議論が行きづまったら、作品そのものに返るのが常道である。われわれはさらに、遁世から生まれた中世文芸の作品のあれこれを求めて、謙虚にそれらの作品自体の語ることに耳を傾けるべきであろうが、そこで一体何が語られるというのであろうか。われわれは、あくまで作品自体に即して追求を進めなければならぬと思うが、わたし自身は、一箇の仮説として、それらの作品がそのまま、当時の非人間的遁世思想の批判者としての役割を果たしたであろうと予想する立場を、とりたい」という著者自身の論にはねかえつてこないたためには、「われわれはこの歌を、無常観の問題を解くための資料として取り上げているのだが、この歌が資料として何を物語るかという問

題に先立つて、この歌をどう解釈すべきかという問題がある。この歌をどう解釈すべきかに先立つてまた、われわれが無常観というものをどう理解しているかという問題がある」という循環論をたち切らねばならないのではないだろうか。切らないかぎりは論争にならないので、ために啓蒙を意図する本書に、再三「ものがわかつているのといないのとの相違である」といつた説得拒否の言があらわれるのをもっとも遺憾に思う。ひとたび著者によつて蒙を啓かれた読者は、更に仮説の証明を求めている。それは問題提起にとどまった著者の今後の課題であると同時に、学界に課された宿題でもあろう。

まじめな意見を述べるのが、真摯な著者の態度に応える道でもあろうかと、身の程も知らず妄言を連ねたが、真意を解せぬ誤読から、著者に御迷惑をおよぼした点が多いのではないかと恐れている。お叱りをいただきたい。なお芭蕉論については意見を異にするが、本書に触発されて考えを深めるところが大きかった。紙数も尽きたので、稿をあらためて御批判を仰ぎたいと思う。(一九六四年九月、世界書院刊。B6版、三一九頁六〇〇円)

○第二十号原稿募集

昭和四十年九月三十日まで
四百字詰原稿用紙三十枚程度